
鏡の美女

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の美女

【Nコード】

N9579M

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ベルサイユ宮殿の鏡の間の鏡に見たこともない美女が現われるという。話を聞いたポンバドール夫人はサン＝ジェルマン伯爵と共にその謎を解き明かそうとするがそこで二人が見たものとは。歴史上の人物を扱ったファンタジーです。

第一章

鏡の美女

ベルサイユ宮殿の鏡の間。近頃ここで奇妙な噂が生じていた。

「また出て来たのですか」

「はい、出て来ました」

「またです」

こうした話になっていた。

「また出て来たそうです」

「鏡の中にです」

「出て来たのです」

こう話していく。誰もが怪訝な、怪しむ顔になっている。

「あの美女がいたそうです」

「そうなのですか、また」

「出て来たとは」

「また面妖な」

「全くです」

そしてだ。このことは宮中での第一の噂になっていた。このことは当然国王であるルイ十五世の耳にも入った。王もそれを聞いていぶかしむのだった。

玉座においてその流麗な顔をいぶかしめさせて。そのうえでの言葉だった。

「鏡の間のそこにか」

「はい、そうです」

緑のみらびやかなドレスに髪を白くさせた細面の美女が応える。彼女は王の傍に控えている。これが王の愛人にして第一の側近であるポンバドゥール夫人である。かなりの辣腕家として知られている。「噂になっています」

その美貌の顔での言葉だ。白い髪を結い上げさせその細い顔をさ

らに細く見せている。

「実際に見た者も多いそうだな」

「私の侍女も見ました」

夫人はここでも話した。

「鏡の中にです。この世の者とは思えない美女が微笑んできているのが見えた」と

「美女であることはよい」

王はまずはそれはいいとした。彼は無類の女好きでもあるのだ。それで歴史にも名前が残っている。

「しかしだ」

「しかしですか」

「あまりにも面妖な話だ」

彼が言うのはこのことだった。

「鏡の向こうの世界は当然我等の世界ではない」

「はい」

「そしてその世界にいる女となるとだ」

「よからぬ存在だと思われるのですね」

問う夫人の顔も真剣なものである。

「その美女は」

「そうだ。間違いなく魔界の存在だ」

それだというのである。王もまた険しい顔になっている。

「それをそのまま放っておくことはできない」

「ではどうされますか？」

「かといっても公にできるものでもない」

このことも言うのだった。王にしてもそれはわかった。こうした話が公になれば宮中で今以上の騒動になるだけではない。外国にも知られ騒動が続く。それがわかつてのことだ。

そうしてだ。彼はここでまた一つの決断を下したのだ。

「よし」

「どうされますか？」

「サン＝ジェルマン伯爵を呼ぼう」

その人物を呼ぶというのである。

「彼なら何とかしてくれる」

「サン＝ジェルマン伯爵をです」

「彼はありとあらゆる事柄を知っている」

これが王へのそのサン＝ジェルマン伯爵という人物への評価である。それを聞いてであった。そのうえで夫人に対してその名前を出してみせたのである。

「だからこそだ」

「わかりました。ではサン＝ジェルマン伯爵を呼ぶのです」

「早急にだ。対処しなければならぬ」

まさにそうだというのである。

「よいな、それではだ」

「わかりました」

夫人は玉座の王に対して一礼した。そのうえでそのサン＝ジェルマン伯爵を呼ぶのだった。すぐに小柄で金髪、猫の様な緑の目をした男が来た。

赤地に白いフリルのある上着とズボンには銀の刺繍や宝石が編み込まれている。それはフランス宮廷の服である。その彼が王の前に来て恭しく一礼してきた。そのうえで彼に対して言ってきた。

第二章

「王よ、御呼びですね」

「うむ、実はだ」

「御用件はわかっています」

「彼からの言葉である。」

「鏡の間のことですね」

「もうわかつていたのか」

「はい」

今の言葉に驚いた王に対してまた答えるのだった。

「何となくですが」

「そうか。それでは話が早い」

「はい、ではすぐにその鏡の間に向かい」

「話の解決を」

「できるのか？それは」

「できます」

自信に満ちた返答だった。

「それはもう」

「そうか、できるか」

「今すぐにかからせてもらいます」

話は早かった。伯爵はもう全てがわかっているといった口調で話していく。王もその傍に控える夫人に対してだ。それを話したのである。

「では」

「うむ、頼んだ」

そうしてであった。彼はすぐにその鏡の間に向かった。王はそれを静かに見ていたが夫人がここで言ったのである。

「伯爵」

「はい？」

今王の間を出ようとする彼を呼び止めたのだ。彼はすぐに彼女の方に振り向いたのであった。

「何でしょうか」

「私も御一緒させて頂いて宜しいでしょうか」

こう言ってきたのである。

「それは」

「奥様さえ宜しければ」

伯爵はにこやかに笑って一礼してきた。

「是非共」

「それでは」

「はい、参りましょう」

こうして二人で王の間に向かった。王はその二人を見送りながら左右の小姓達に対して話すのだった。

「さて、それではだ」

「これからですか」

「何が起こるかですか」

「そうだ。それを見ることになる」

冷静な言葉であった。

「しかしだ」

「しかし？」

「このことは他言無用とする」

ここでは言葉が強くなった。

「よいな」

「他言無用ですか」

「そうだ。誰にも言ってはならん」

言葉は厳しい。王としての威厳もそこにはあった。

「わかったな。忘れるのだ」

「わかりました。それでは」

「それは」

宮廷においては忘れるということも重要であった。彼等はそれに

頷くのだった。そのうえで、だった。彼等は沈黙の中に入ったのであった。

鏡の間は今誰もいない。静まり返っている。

白銀のシャンデリラが無数に吊るされ一方には窓がありもう一方の窓を模した場所に鏡が連なっている。様々な絵画で飾られ天井は黄金色である。伯爵と夫人はその中に入ったのだ。

そしてだ。伯爵はその中で夫人に顔を向けて言ってきたのである。

「その美女がいる鏡ですが」

「はい」

「これですね」

丁度部屋の中央の鏡であった。

「ここにいますね」

「おわかりなのですか」

「気配を感じますから」

だからわかるというのである。

第三章

「彼女はこの中にいます」

「左様ですか」

二人はその鏡の前にいた。夫人はその鏡に怪訝な顔になっている自分自身を見た。その横にいる伯爵は至って落ち着いたものである。

「ほら、御覧なさい」

伯爵が言つとであつた。

「美女がもういますよ」

「えっ!？」

その言葉に驚くとであつた。確かにそこに美女がいた。栗色の豊かな髪に青い目をした美女である。服は彼女達と同じ絹の白い豪華なドレスである。

「この方ですね」

「あの、この女性は一体」

「住人です」

まずはこう答える伯爵だつた。

「しかしです」

「しかし？」

「私達の世界の住人ではありません」

それは違うというのである。

「あちらの世界の住人なのです」

「魔界でしょうか」

「魔界ではありません」

それは否定するのであつた。

「鏡の世界です」

「鏡の世界なのですか」

「はい、どうやらこの人は」

伯爵はその美女を見ながら夫人に話していく。

「たまたま私達、こちらの世界が見えるようですね」

「私達の世界が」

「ここはなおさなくてはなりません」

伯爵は冷静な面持ちでまた夫人に話した。

「では、中に入りますか」

「中に入りますと」

「ですから鏡の中にです」

そこだというのである。

「鏡の中にこれから入りましょう」

「あの、簡単に申されますが」

夫人は伯爵の言葉が現実のものには思えなかった。それでいぶかしむ顔になってだ。そのうえで彼に対して言葉を返したのだった。

「鏡の中ですよね」

「はい、そうです」

「入られますか？ その様な場所に」

「ええ、見て下さい」

伯爵は夫人の今の言葉に応えとだった。うつすらと笑ってそのうえで右手を前にやってだ。鏡に当てた。するとそれだけで、であった。

「えっ!？」

「こうしたことできますので」

何とその手が鏡の中に入っていく。まるで水面の中に手を入れるかの様にだ。手と鏡の接点がまさに水の中に入ったかの様に入り込んでいる。それが徐々に深くなっていく。

そのまま身体をさらに入れながらだ。夫人に対しても言ってきた。

「奥様も」

「私もですか」

「はい、私の手に掴まって」

まだ鏡の中に入っていない左手を差し出しての言葉だった。

「どうぞ」

「鏡の中に」

「そうです。どうぞ」

また言うのであった。

「私の手に掴まって」

「それでは」

今見ている光景が現実のものとは思えない。しかし夫人は伯爵の言葉に従いそのまま自分の左手を差し出した。そのうえで彼女も鏡の中に入るのだった。

まさに水面を越える感じだった。だがそれでも濡れはしない。通り抜ける感じだった。そのうえで鏡の中に入るとであった。

そこは宮殿であった。ベルサイユ宮殿の鏡の間だ。彼等がつい先程までいた世界である。しかしであった。

「逆さまになっていますね」

「はい、そうです」

伯爵は部屋の中を見回しながら述べる夫人に対して答えた。

第四章

「鏡の世界ですから」

「左右対称になっていますね」

「その通りです。全てが逆になっている世界なのです」

「それが鏡の世界ですか」

「そう、そして」

彼はさらに言ってきた。

「それと共に全てが同じ世界なのです」

「逆でありながら同じ」

「それが鏡の世界です」

そうだと話すのであった。

「そしてです」

「そしてですか」

「彼等から見て私達も同じです」

「鏡の世界になるのですね、私達が」

「私達の世界と彼等の世界はそれぞれ鏡映しになった逆の世界」
伯爵の説明は続く。

「ですから」

「ではここにも私が？」

「はい、おられます」

夫人もこの世界にいるというのだ。

「こちらの世界の貴女がです」

「そうなのですか」

「それにあの奥方ですが」

今度は鏡の世界から見えたその美女についても話した。

「見覚えはありませんか？」

「あの美女にですか」

「そうです。あると思いますが」

「そういえば」

夫人はその整った顔に少し憂いにも見える考えを及ばせて述べた。言われてみれば確かに彼女にもはつきりと見覚えのある顔であった。「モンフェラート伯爵夫人ですね」

「そうです、あの方です」

「あの方だったのですか」

「はい。そしてです」

「そして」

「私もいます」

伯爵は自分もだと話した。

「この世界にです」

「貴方もですか」

「そして同じことを考え同じ王から同じ御言葉を頂いています」
微笑みながらの言葉だった。そうだというのだ。

「ですから」

「ですから」

「話はそれで終わります。おられますね」

「はい」

伯爵の言葉に伯爵の言葉で返って来た。

「来られる頃だと思っていました」

「左様ですか」

「はじめまして」

二人のところに来たのは彼だった。紛れもなく彼が来てだ。そのうえで挨拶をしてきたのだ。

それは紛れもなく伯爵である。しかしやはり服が逆になっている。ボタンの向きでそれがわかる。何もかもが逆になっている彼がやって来たのである。

「もう一人の私」

「どうも、もう一人の私」

こちら側の世界の伯爵も微笑んで言葉を返したのであった。

「今回はです。どうやら」

「そうですね。世界の結界が弱まっています」

「どうやら」

二人で言い合うのであった。

「それでは。今より」

「はい、今より」

「世界を正しく分けましょう」

「それでは」

こう自分達で話してそのうえで決めてだ。二人で夫人に顔を向けてきた。まずは鏡の世界にいる伯爵が彼女に対して微笑んで述べてきた。

「はじめまして、こちら側の奥様」

「え、ええ」

女だてらと呼ばれる程肝が据わっている彼女であるが今度ばかりは何と言っていいかわからなかった。それで戸惑いながら言葉を返したのだ。

「サン＝ジェルマン伯爵ですね」

「はい、こちらの世界のです」

「そうでしたね。鏡の世界の」

「そう、私から見れば貴女が鏡の世界の住人になりますが」

このことを鏡の世界の伯爵も話した。こちらの世界の伯爵と言っていることは同じである。

「そうなります」

「左様ですか」

「こちらの世界の貴女にはよくして頂いております」
微笑んだ顔での言葉であった。

第五章

「とても」

「左様ですか」

「そうです。では貴女は」

「はい、私は」

「お先にお戻り下さい」

こう言ってきたのである。

「私達でしますので」

「では私は」

夫人は二人の言葉を聞いて述べた。

「このまま」

「いえ、それでもです」

こちら側の伯爵がここで彼女に言ってきた。

「奥様、私の手に」

「掴まれというのですね」

「私は私だけでこの世界から出られます」

彼はそれでいけるといっているのである。

「ですが奥様はです」

「そうですか。それで」

「はい、お掴まり下さい」

また言う彼だった。

「それで御願ひします」

「わかりました。それでは」

「はい」

こうしてであった。夫人は自分のいる世界の伯爵の手を掴んだ。

伯爵はそのうえで一旦鏡の世界を出た。また水面を越える様に出た。それからであった。伯爵は鏡に身体を向けなおした。向こう側には鏡の世界の彼がいる。夫人の目にはまさに鏡合わせに映った。

その二人がそれぞれ右手を出す。そのうえで鏡面に触れ合う。手と手が合さりそのうえで。鏡の向こうの彼は一見すると何も変わってはいなかった。

しかしであつた。ここで伯爵は言うのであつた。

「これでよしです」

「これで、なのですか」

「はい、御覧下さい」

こう言うのであつた。彼は鏡の前から離れた。するとそれと共に彼の姿は鏡から消えた。夫人も確かにその光景を目にした。

「これでおわかりですね」

「そうですね。元に戻ったのですね」

「そうですね。元に戻りました」

まさしくそうなのだというのだ。

「これで完全に」

「夢の様な話ですね」

「ですが本当にあつたことです」

伯爵はこう夫人に言うのであつた。

「それはおわかりですね」

「はい、あちらの世界に行きましたし」

「そうですね。その通りなのです」

また言う彼だった。

「しかしこれで元に戻りました」

「左様ですか」

「そしてです」

「そして？」

夫人は伯爵の言葉が変わつたのを感じ取つた。そのうえで彼に問い返した。

「何かあるのですか？まだ」

「あります。まずはこれで二つの世界の境目はまたはっきりしたものになりましたが」

「はい」

「こうしたことはままにしてあるものなのです」
「そうなのだというのだ。」

「それぞれの世界の境目があやふやになることはです」

「あるのですね」

「そうです、あります」

夫人に話を続けてきた。

「ですから、よく覚えておいて下さい」

「左様ですか。我々の世界とは別の世界との境が」

「それが時としてこうしたことにもなります」

鏡の世界の人間が見えるそのことがだ。

「時には怪しげな世界もありそこから怪しい存在が来ることもあります」

「悪魔……」

夫人はすぐにそうした存在が何かを察した。そして剣呑な顔になつて言うのだった。

「そうした存在もまた」

「我々が天使と呼ぶ存在もです。そうしたこともあります」

「成程。そうなのですね」

「はい、それではです」

伯爵はここで話を終えた。そうしてだった。

「陛下に御報告に参りましょう」

「はい、それでは」

こうした話をしてであつた。彼等は二人で鏡の間を離れた。鏡は今は何も映っていないかった。世界は確かに元に戻っていたのだった。

2
0
1
0
.
3
.
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9579m/>

鏡の美女

2010年10月8日13時44分発行